

女性会員の皆様がた、ぜひ、一歩前へ！



菅 寿 美

分析化学会では、昨今、会員数の減少問題に直面しています。それに伴う活動見直しの結果、この「ぶんせき」誌も2022年第2号をもって正会員への冊子体配送が停止となり、電子体に移行することが決まっています。

会員数の減少に歯止めをかけるには、当該分野に興味を持つ若者を増やす努力が必要でしょう。ここに気になるデータがあります。男女共同参画白書（令和2年版）によると、4年制大学への進学率は女子が50.7%、男子が56.6%です。専門分野ごとに見てみると、例えば理学、工学、農学の各学部における女子学生の割合は、それぞれ27.9%、15.4%、45.1%であり、大学院博士課程では、それぞれ19.7%、18.3%、36.3%となります。これは何を意味するのでしょうか？もしもいわゆる理系の研究分野が女子学生を上手に取りこめないでいるのなら、彼女たちへのアピールがこの問題のひとつの突破口とならないでしょうか？

日本の女子高校生が男子に比べて理系を敬遠する傾向にあることは上記のとおりですが、実はより幼いころからその兆しが見られます。2018年に行われたある調査で、小学6年生までの男児の将来の夢の1位は「学者・博士」でした。これは日本人のノーベル賞受賞や理科教育の充実が影響しているのだろうと考察されていますが、女兒では上位9位までに「学者・博士」は入っていません。ノーベル賞受賞に国内がわく様子は男女関係なく見聞きし、同じ理科教育を受けているはずなのに、このような男女差が生じたのはなぜでしょう。男女で生まれつき嗜好が異なるのでしょうか？その可能性を否定することはできませんが、一方で、保護者が理系である場合に文系である場合よりも女の子が理系を選択する割合が多いという報告例や、理系科目に女性教員がいた場合に女の子が理系を選択する割合が増えるという報告例が存在します。また、世界に目を向けると、自然科学・数学・統計分野の高等教育を受けた学生中の女性割合は、OECD平均では50%ですが、日本では25%という結果が出ています（2017年報告）。これらを考え合わせると、日本の女性の理系敬遠は、男女の生得的な脳機能差よりも、社会環境要因により強く支配されているのではないかと感じられます。

子供が将来の夢に選ぶのは、目にする機会のある魅力的な大人です。日本では子供たちが女性の「学者・博士」と出会う機会はごく限られているため、女兒のあこがれの存在となりにくいのでしょう。また、子供に科学技術系の職に就くことを期待する両親の期待感、同じ成績の女の子に対するよりも男の子に対するほうが大きいそうです。このような期待の格差は女の子の理系分野への興味を抑制し、人材育成を妨げている可能性があります。

高校生の進路は本人の興味だけで決定できるものではなく、経済的な問題や就職の展望、あるいは人生設計との兼ね合いも重視されます。分析化学を学ぶ学生を増やすためにはいくつものハードルを越える必要がありますが、まず私たちができることから取り組んでいくことが大切でしょう。

そこで会員の皆様がた、女の子にだって男の子にだって、理科は楽しいんだよ、とちょっとアピールしていきましょう。とりわけ女性会員の皆様がた、女の人にだって普通に研究の仕事をするんだよと、一歩前に出て、女の子たちのロールモデルになってください。この分野に興味を持つ子供が増え、理系の学生数が増え、研究者・技術者が増え、分析化学会の会員数の増加につながりますように！

〔Hisami SUGA, 海洋研究開発機構, 「ぶんせき」副編集委員長〕